

あまのこ

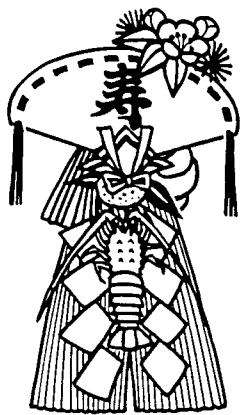
会報第十二号

発行所 平成一〇年一月一日
 編集人 南洲吟道会 広報局
 発行人 会長 吉永龍洲
 〒一六五 中野区白鷺二ノ三四ノ五
 (社) 日本吟道学院南洲吟道会
 ☎〇三(三三三〇)七〇〇九

先ず隗より始めよ

全会員の皆様
 明けましておめでとうござります。
 今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

会長 吉永龍洲



栄光二〇年の歩み、創立二〇周年記念大会を大成功のうちに送り、二十一年目を力強く踏み出しました。同志の皆様には、ご家族お揃いでよき初春をお迎えのことと拝察申し上げます。

しかし一部の方々にはご親族のご不幸に遭われ、さぞお力落としのことと、ご心痛の程お察し申し上げます。どうぞ悲しみを乗り越えて元氣を出して下さるよう只管お祈りいたします。

吟は不思議なものです。悲しみに沈む心に、慰めと力を与えてくれるものです。顧みますれば、平成六年も亦平成五年に劣らず会員は増加の一途を辿りました。

道会会報

平成五年 五八名
 二月五日付 瑞洋教場 渡辺俊洲様 (四三五番) から
 十一月十四日付 八王子会 脇 成吟様 (四九二番) まで
 平成六年 四一名
 一月七日付 いずみ会 小坂初吟様 (四九三番) から
 十二月六日付 龍陽会 湊山冨子様 (五三三番) まで

右のとおりでありまして、これ一重に同志各位のご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。先ず隗より始めよ」でございますが、冒頭に掲げました「先ず手近なことから始めよ」という故事(中国戦国策)にありますように、更に南洲吟道会を拡大充実する為には、身近なフアミリー、友人、知り合いを先ずお誘いする事肝要かと存じます。総本部という師範位(準師範・師範・助教授・教授・範師等)は単なる「飾り」ではありません。準師範以上資格をお持ちの方は一人でもいい、指導を始めて下さいます。そして吟道を学ぶ喜び、恩恵を一人でも多くの方に頒ち合いたいと念ずる次第です。

どうぞお会員各位におかれましては、より一層のご尽力をお願い申し上げますと共に、皆様のご多幸をお祈りして年頭のご挨拶いたします。

平成七年度定時総会・温習会の日程決まる

日時：平成七年五月二〇日(土) 十時
 場所：野方区民ホール

催物のお知らせ

◎新春邦楽舞台初め 琵琶楽名流大会
 日時：一月十四日(土) 十二時開演
 場所：銀座ガスホール
 出演：吉永鶴陽 一那須与一

◎独吟研修会(二回目)
 日時：一月二十九日(日) 十三時から
 場所：日吟ホール
 奮ってご出吟下さい。

◎ピクチャー吟友会——吟と舞の集い——
 日時：二月十二日(日) 十時開演
 場所：日刊工業ホール(九段)



◎関東甲信地区推薦吟決選大会
 日時：二月十九日(日) 十三時から
 場所：日吟ホール

◎青少年大会
 日時：三月十二日(日)
 場所：文京区民センター(予定)

◎吟神リサイタル
 日時：三月十九日(日)
 場所：九段会館
 奮ってご出演下さい

◎(社) 日本吟道学院定時(予算)総会・正会員吟道大会
 日時：三月二十五日(土)
 場所：にしゅう会館(市谷)
 正会員の方はお繰合せの上ご出席下さい

教場めぐり

熟年教場からこんにちは

熟年教場 高橋愛祥

私達の教場は、中野区立鷺宮地域センターにて水曜日午前十時より二回、午後一時半より二回の月四回、吉永龍陽・橋本椿龍両先生にご丁寧にご指導戴いております。去る昭和五六年四月一日に、前教場長の高橋雄祥先生によって開設され、吉永会長先生が熟年教場と名付け

て下さいました。発足当時は十名でうち八十歳以上が二名おりました。現在会員数は十五名でうち八十歳以上が四名元気で頑張っています。張一昨年、昨年、高年齢者特別表彰(皆伝以上取得者)として、五名がシルバ―表彰を受けました。これらも全て吉永先生、橋本先生のご指導のおかげです。オメデトウゴザイマシタ。毎年四月には、開設を記念し、両先生を囲みお茶会を催していただきます。年令の若い方には皆若々しく、指導の両先生のご熟年教場を今、共々よろしくお願いたします。

詩吟と私と心

六十年近く人生を過ごして、詩吟と記憶し吟じられる詩は川中島の二行位で、私が小学校の頃父親が口ずさんでいた時に真似したものを記憶していたにすぎない。今



中町南洲吟道会 玉城まき子

父親の年令に達して初めて詩吟を勉強している事に、因縁を感じている。看護と言う最も人の心を大切に考えなくてはならない職業に身を置いてきた私にとって、詩吟の心に共鳴できる部分が沢山あり、しかも二十周年大会にも参加させていた。だき老若男女の方々が朗々と吟じている様子を拝見し、病める人々の心にも吟を通じて癒せる部分が見つかるかもしれないと期待して吟道を学び、心にゆとりがもてるよう時間をかけて頑張りたいと思う。

秋の昇段審査を終えて

中町南洲吟道会 中村和子

退職してのんびり過ごしているこの時期に、「昇段審査」とは私にとつて驚きと共に緊張と不安でいっぱいでした。秋雨の降る十一月六日、緊張と不安を胸いっぱい抱きながら、吉永先生ご夫妻の前で審査を受けました。無事終わってホッとすると同時に詩吟に出会えたこと、それは未知の世界であった詩吟という目標を私に与えて下さったことです。詩吟に入門させていただいたことに感謝！感謝！で、いっぱいです。

国分寺教場の背景

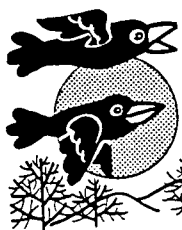
国分寺教場 松本江龍

国分寺教場は、国分寺市の恋ヶ窪公民館で毎週金曜日の夜、少人数ながら吟道に精進しています。国分寺などと言つと抹香臭いと思ひますので、武蔵国分寺の歴史の一端を紹介いたします。武蔵の国は、大化元年（六四五）中大兄皇や中臣鎌足が蘇我氏を倒し、律令政治が定められて誕生した名前です。武蔵の名は、朝鮮語のマサシ（馬牧）説、焼畑説、チャシ（アイヌ語で皆の意）説などがあるとのこと。国分寺は天平十三年（七四一）聖武天皇の詔勅によつて建てられたものです。当時ひんぱんに起こった地震、疫病などから国家を護り、安泰を願うためでした。然し正慶三年（一三三三）新田義貞と北条泰家との一分倍河原の合戦の兵火により消失したと伝えられ、現在は樂師寺に武蔵国分寺の本尊薬師如来像が昔を物語るのみです。扱、恋ヶ窪とは又、色っぽい名前ですね。恋ヶ窪は、国分寺の内でも古くから人々の住みついていたところ。当時、府中に国府がありその周辺の窪地であつたところから「国府ヶ窪」と呼ばれていたとする説、あるいは水の豊富な土地柄ゆえ、池などに鯉がいたため「鯉ヶ窪」と呼ばれていた説などがあります。畠山次郎重忠と遊女との悲恋物語から現在の恋ヶ窪になったといわれています。このように歴史ある武蔵野の一隅で吟道を学べることは、感謝あるのみです。

旅日記

五台山・雲崗・龍門石窟の旅

熟年教場 小宮正祥



昨年の六月十六日、羽田空港より国内線で大阪へ、大阪にて航空機を乗り換え北京へ、到着後天安門広場を観光し早目にホテルへ。北京国際飯店泊。里の長城の慕田峪へ、午後北京市内観光、景山公園鼓樓天文台、大府井へ、夜、寝台列車に乗り大同へ向かいました。十八日朝、山西省の省都大同に到着、チュウロンピノ華嚴寺、銅細工工場、善化寺を見学し午後雲崗石窟へ。芸術的で美しい仏像や壁画はすばらしかった。十九日、四大聖地の一つ五台山へ、途中恒山の麓の懸空寺を観光、岩にはり付いた様なお寺でした。二十日、五台山のお寺巡り、馬に乗って登った南山寺合計六ヶ所を廻りました。階段が多く疲れました。二十一日、専用バスで太原へ、仏光寺に立ち寄り途中で下車し豆村で日中友好をいたしました。二十二日、山西省の古都平遥へ、平遥は城壁や民家など昔の面影を残していました。二十三日、太原市内観光、山西省博物館、双塔寺見学昼食後列車に乗り運城に到着、運城賓館泊。

二十四日、運城郊外の水楽宮へ、午後洛陽に向けて出発、黄河の大橋を渡り三門峽を通過し、夜遅く洛陽に着す。二十五日、中国三大石窟の一つ龍門石窟へ、この日は前日夜の雨で中国で最も古い寺と言われている白馬寺に行きました。ところが門前に池のような水が溜まっており、車ごと水の中を走りお寺に着きました。二十六日、河南省の省都鄭州へ、途中北宗時代の王の墓宗陵を観光、鞏県は杜甫の生まれ故郷であり大きな像が街の中心に立っています。食後一風変わった鞏県石窟を訪れました。その後杜甫の生家、下沈式窟洞（ヤオト）と言つて穴の家を見学、近くに記念館もあり、感無量でした。又引き返し杜甫の像の前で記念写真撮り車に戻り杜甫の有名な「春望」を吟じました。皆さん大変喜んで何よりの供養になったと大勢の方々が評して下さいました。余り日本人が行かない程の山奥でした。二十七日、鄭州観光、大河村城壁陳列館を訪れ、午後プロペラ機で上海へ、到着後夕食は特別料理でサヨナラパーティー、貴都大酒店泊。二十八日、工業展覧館にてショッピング、午後の日本航空七九七便にて大阪へ、入国手続き後航空機を乗り換えて羽田へ、到着後解散、非常に有意義な旅でした。

仙石原とカツコウ

池尻教場 赤山双龍

四季の移り変りを逸早く感じさせてくれるなかに、鳥の鳴き声がある。これを楽しみに、池尻教場で一同揃つて、箱根仙石原に二泊の旅に出た。早朝、ホテルの屋上に出てみると、心地良い冷気で一瞬身体がヒヤツとする。空気が美味しい。眼下に広がる広大な緑の草原と、それを囲むように遠く外輪の山々が陽が昇るにつれて陽光に美しく映えている。大自然の中で、澄んだ空気を思う存分身体いっぱい吸い込み、思いきり吟声を張り上げ爽快な気分を味わうことが出来る。裏の森では、カツコウが吟に合せているかのようには鳴きつづけ、やがて遠くへ去つて行く。仙石原の初夏に最もふさわしい「カツコウ」のすがすがしい声を堪能し、お湯につかりながら身も心もリフレッシュした十二年前の六月。

詩歌投稿



◎新体詩

西郷南洲

八王子南洲吟道会 脇 成吟

安政五年の霜月なかば、月影碎く薩摩の頼戸の波間に沈む勿頸の友、一人は死して大義に殉じ奇しくも君はよみがえり、宏謨を翼けて素志を成しぬ、哀れは尽きせず懐往の詩

相約して淵に投じ 後先無し
豈凶らんや波上 再生の縁
頭を回らせば十有余年の夢
空しく幽明を隔てて墓前に哭す。

自から危き使に死して、国威の張るべき基を立つと、至誠をこめたる遺韓の論、破れし恨み、残さぬ心、再び世事を口にせず、都督の大任辞して去りぬ、逸情見るべし、村莊の詩

我が家の松籟 塵縁を洗う
満耳の清風 身仙ならんと欲す
誤つて京華名利の客と為り
此の声聴かざること己に三年

死所を求めて死所に遭わず、笑って残骸子弟に許し、賊の名負いつつ世を去りし君、得喪毀誉のほだしを断ちし、ああ我が無我の英雄の高風誰か慕わざらん尊ぶべきかな述懐の詩

幾たびか辛酸を経て 志始めて堅し
丈夫玉碎するも 専全を愧ず
我が家の遺法 人知るや否や
児孫の為に 美田を買わず

◎俳句

三峰に

舞い舞う金の 落葉かな (三峰登山ケーブルにて)

会 長 吉永龍洲